

篠山市域の中近世城郭を中心とした研修

京都府立大学文学部歴史学科 2 回生
岩永 紘和

はじめに

八上城は、篠山盆地の南に位置する標高 462 メートルの高城山に築かれた山城である。戦国大名波多野氏に関わる遺跡であり、戦国時代から安土桃山時代にかけて、城と城下町の変遷が分かる貴重な遺跡でもある（八上城研究会 2000；16 頁）。1990 年代以降、保存運動がおこなわれ（中村 2000；67 頁・中村 2004；127 頁）、平成 17 年（2005）には国史跡にされた（篠山市教育委員会 2006；4 頁）。

ここでは、2014 年度フィールド研修及びその補足調査で訪れた、国指定史跡の八上城跡など、篠山市における中近世城郭の現状や活用状況について、自分の見聞を中心にまとめることにする。

1 篠山市の文化財行政における八上城跡

9 月 2 日（火）の 11 時から 12 時 30 分の間、篠山市役所にて篠山市教育委員会社会教育・文化財課の成田雅俊氏から、篠山市の文化財行政のことや歴史文化基本構想に関するお話を聞く機会があった。八上城跡に関することは、以下の通りである。

平成 13 年（2001）からおこなわれた八上城・法光寺城跡学術調査の背景として、市内では合併に伴って旧町時代の懸案事項を解決しようとする気運にあった。また、歴史文化基本構想にあるように八上城跡を含む篠山市内の様々な文化財の一体的な保存・活用を図っていくことが目指されるようになるの

は、福住地区の伝統的建造物群の保存対策事業がおこなわれるようになった平成 19 年（2007）以降とのことである。

また、文化財は市民の方々の支持なしには成り立たないということ、少子高齢化などの問題でまちづくりが大きな課題となり、文化財もまちづくりに活かしていくことが求められていることについてもお話を受けた。

2 史跡篠山城跡とその周辺の調査

9 月 2 日の 15 時から 17 時 30 分の間、近世における篠山藩の政治的拠点となった篠山城跡とその周辺の調査をおこなった。調査では、方形縄張りの様子や、堀、高石垣、東・南の馬出の遺構や復元の実態を見学した。平日でも観光客が訪れていることから、篠山城跡が篠山市における中心的な観光名所の一つとなっていることがわかった。

施設としては篠山城大書院や武家屋敷安間家史料館を訪れた。大書院では、江戸期における篠山藩の情勢やキャスルウェディングの紹介などを見学した。

復元された篠山城跡の大書院や高石垣の様子からは、江戸幕府の重要拠点として天下普請で築かれた近世城郭としての偉容が偲ばれた。また築城当時の石垣と保存整備された部分との差異を明確にする必要があるなど、議論が研修参加者の間で交わされた。

篠山城跡の天守台からは八上城跡のある高城山の全容を眺望できるように、両者は地理的に近い関係にある。また、高城屋敷門や誓願寺など多くの建築物が、かつて八上城下町から篠山城下町に移築されたと伝えられている。八上城跡と篠山城跡とは、歴史的に強く

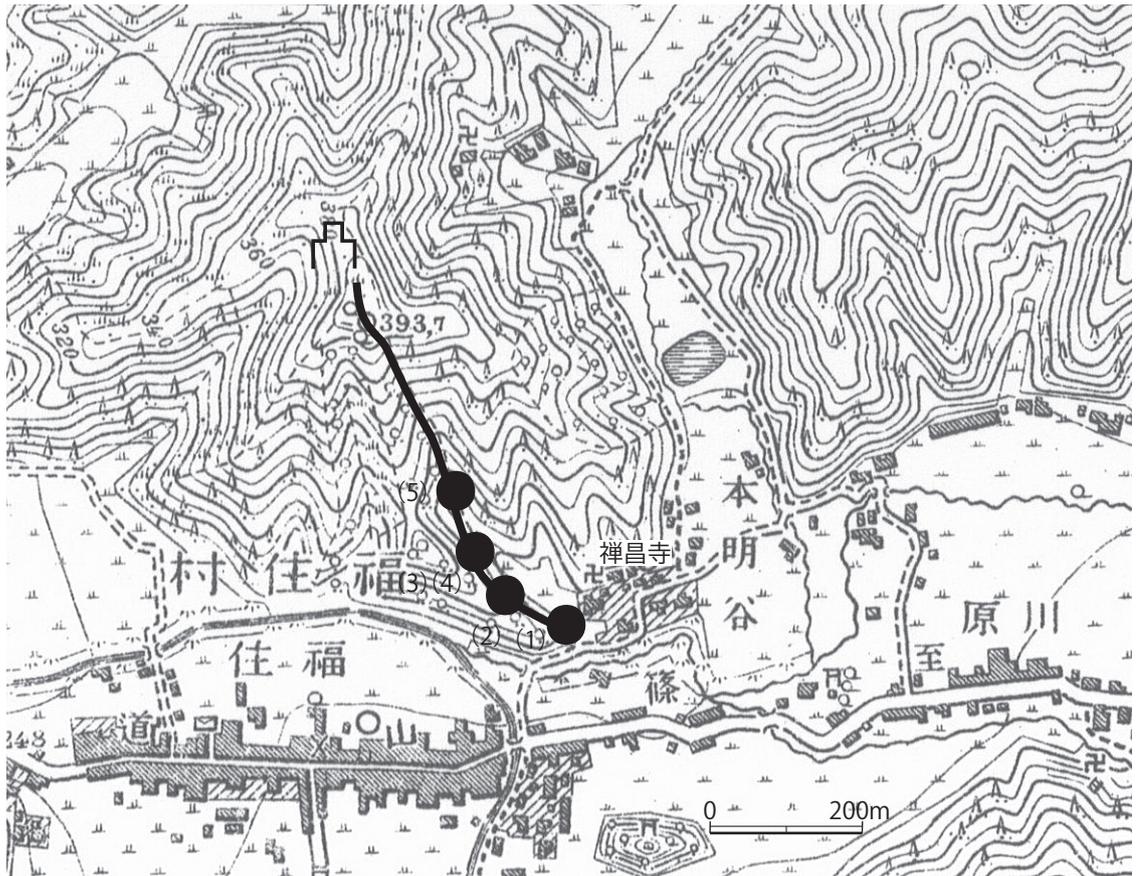


図1 粉井城跡への登山道踏査図（正式2万分1地形図「福住村」を2倍し加筆、番号＝撮影地点）



図2 粉井城跡踏査図（八上城研究会2000：297頁に加筆、番号＝撮影地点）



写真1 登山道の入口



写真4 説明板



写真2 倒れた説明板



写真5 忠魂碑と大砲



写真3 休憩所の様相



写真6 苔むしたベンチ



写真7 登山道



写真10 井戸跡か



写真8 碓井公園の碑



写真11 削平地の遺構



写真9 対空監視所跡か



写真12 堀切の遺構

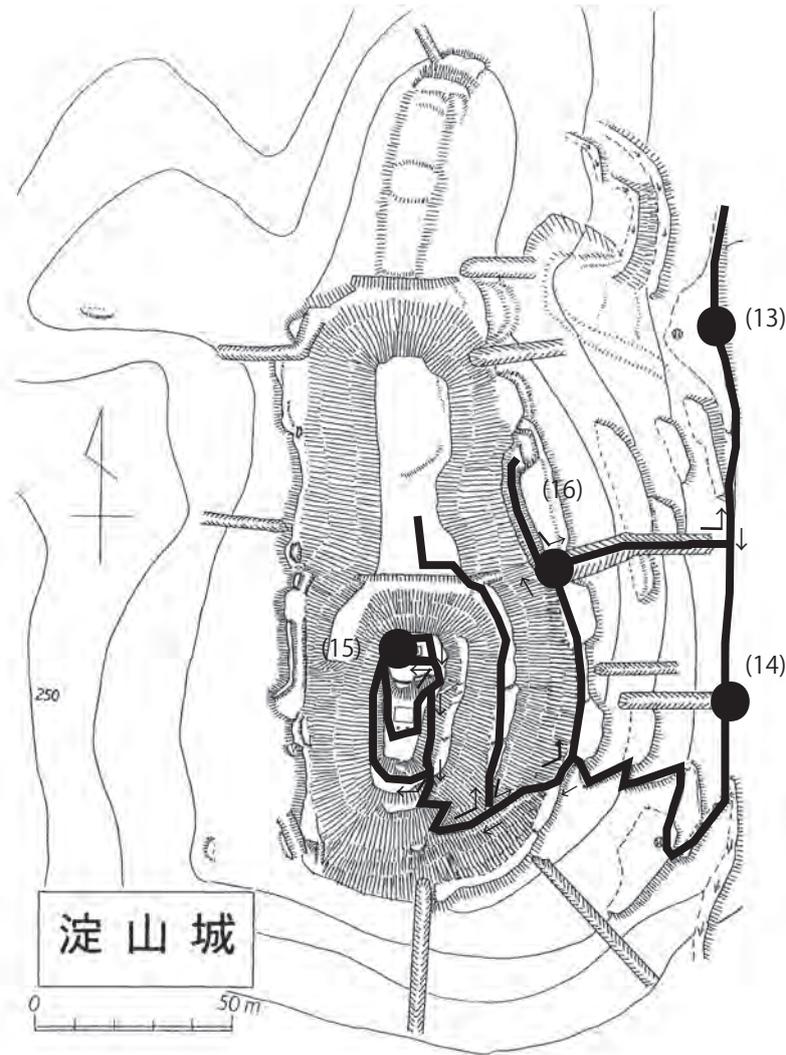


図3 淀山城跡踏査図（八上城研究会2000:273頁に加筆、番号=撮影地点）

つながっており、八上城下町が篠山城下町の基礎を形作っていることが研修を通じて理解できた。

3 福住の粕井城跡についての調査

(1) 村上由樹氏のお話

9月3日の9時から11時の間、さんば家ひぐちにて篠山市教育委員会社会教育・文化財課の村上由樹氏から、福住地域の文化財についてのお話を聞く機会があった。

福住には戦国時代における八上城主、波多野氏の家臣である粕井氏が居城とした粕井

城跡も存在している（藤井 1981；326 頁）。福住地域にある粕井城跡は、過去に登山道の整備がおこなわれている。しかし、整備を本格的に進めるとなると地元の方々の負担が増えるため、市としては整備の準備があっても地元の方々の要望がない限り動くことはできない現状にある。また、同じ福住にある安口城跡・安口西砦跡の整備はあまりなされていないとのことであった。

(2) 粕井城跡踏査（図1、2）

お話の後、福住の町並みを見学し、それから11時半から12時20分まで粕井城跡を研修参加者のうち2名で見学した。



写真 13 井戸郭のベンチ



写真 15 桜の記念植樹



写真 14 豎堀の遺構



写真 16 堀切の遺構

道程は、禅昌寺横の登山道（写真1）から倒れた説明板（写真2）や休憩所（写真3）、忠魂碑や大砲の遺構（写真5）、苔むしたベンチ（写真6）を見学しつつ登山道（写真7）を登った。そして、豎堀や削平地、堀切などの遺構を確認した後、同じ道筋を通過して下山した。城跡を調査している間、誰にも出会うことはなかった。

山頂部分では、篠山市出身の軍人本郷房太郎の名が見える石碑（写真8）や対空監視所と思われる遺構（写真9）など近代の足跡も確認した。井戸跡と思われる遺構（写真10）、削平地（写真11）や堀切（写真12）、豎堀の遺構もよく残っていた。

山頂にいたるまでの登山道にはいくつか説明板が設置されていたが、靱井城跡についての詳細な解説はなく、むしろ福住地区の小学生を含めたハイキングコースとして活用されている状況がうかがえた（写真4）。ただ、激しい風雨などの理由からか説明板の多くが

倒れており、苔むしたベンチと相まって継続的整備の難しさを実際に目にすることになった。

4 辻の淀山城跡についての調査

篠山市にある辻集落は、波多野氏の家臣であった波々伯部氏の築いた淀山城跡、東山城跡、南山城跡がある（八上城研究会 2000；272-274 頁）。丹波新聞公式 Web サイトによると、辻集落では、平成 21 年（2009）篠山城築城 400 周年を機に淀山城跡の登山道周辺の雑木や竹林を伐採整備し、道沿いに案内板を設置するなどの活動がおこなわれた。平成 25 年（2013）までに東山城跡、南山城跡の整備も完了し、集落の連帯感や資産を守ろうとする機運が高まっている。

今回の調査では、そのうちの淀山城跡についての調査を中心におこなった。

(1) 津田博利氏のお話

9月4日9時から10時の間、辻公民館にて「辻を知ろう歩こう会」の津田博利氏から、会における、淀山城跡などの山城も含めた里山整備についての活動報告と波々伯部地域の歴史についてお話を聞く機会があった。

この会は「辻の歴史の変遷について実際に歩いて学び、環境保全も含め史蹟を後世へ継承すること、メンバーの健康増進を図っていく」という目的で設立し、現在は辻集落だけでなくひろく篠山市域全体の歴史を学んでいるという。その際には、田中豊茂氏をはじめノオトのメンバーの協力も得ている。

その後、波々伯部氏の事柄を中心に、波々伯部地域の歴史について説明を受けた。また、辻集落内にある山城の築城時期の違いに伴う構造上の特色などについて学んだ。

淀山城跡へのまなざしについて、近世の伊能忠敬がこの地を城跡と認識していたこと、また近代以降も書物に淀山城跡についての記述があることから廃城以降も「城跡」としての認識は継続していたようだ。しかし、津田氏自身が幼少の頃には城跡であるという認識はほとんどなくなっていたという。

(2) 淀山城跡踏査 (図3)

その後12時まで、津田氏のお話を聞きながら、研修参加者のうち8名で、淀山城跡や辻の村落景観を見学した。

道程としては、基本的には整備された登山道の道筋に従いつつ、井戸郭や付近に設置されたベンチ(写真13)、竪堀(写真14)を見学し、2カ所の郭を通過して主郭にいたった。主郭で説明板や石碑、桜の記念植樹(写真15)などを見学した後、腰郭や二の郭を確認し、最終的に堀切(写真16)から下山した。

実際に堀切を下ると、深くほられた堀によって行動が大きく制約された。今まで、たてに堀をほることでどこまで防御力を高められるのか想像できなかったが、実際に歩くことでその意味を十分に理解した。城跡を見学している間、誰にも出会うことはなかった。

井戸や竪堀、横堀などの遺構についての詳細な説明に加え、登山道や説明板、木々の伐採整備や桜の植林など、会の整備事業の具体的な内容を実際に見て知ることができた。また、辻集落内で小学生の中で地域の歴史に積極的な関心を持ち始めている子も出てきたようだ。

5 国史跡八上城跡と関連遺跡群 についての調査

(1) 池田正男氏のお話

9月3日の19時から21時の間、王地山公園ささやま荘にて八上校区まちづくり協議会会長の池田正男氏からお話を聞く機会があった。

池田氏はかつて兵庫県の埋蔵文化財などの調査に携わっておられた経験をもつ。その経験も踏まえて八上城跡の国史跡指定への経緯や八上校区における八上城跡に関わる活動について説明を受けた。

国史跡指定への経緯について、兵庫県の城跡の中で八上城跡の国史跡への申請が迅速に行われた背景には、指定申請面積の90パーセント以上が国有林や県有地に属しており、所有者の数が限られていたことがある。国史跡指定には複雑な申請手続きをする必要がなかったことも大きな要因をなしている、とする池田氏の言葉から申請制度の観点から史跡指定を考えていく重要性を知った。

現在における保存活用については、八上城跡クリーン作戦に代表される登山道整備などの活動を続けているという。

さらに、八上城跡のある高城山は、「丹波富士」とも称されている。高城山について、広報『やかみ高城』の題名、八上小学校校歌の歌詞、八上ふれあい夏祭りにおける高城山の眺望を考慮したステージ配置から八上校区の象徴として「高城山」があることを理解できた。

また、地域の方々にとっての八上城跡へのまなざしについて、八上校区内においても保存活用への関心に温度差があるという現実も知った。

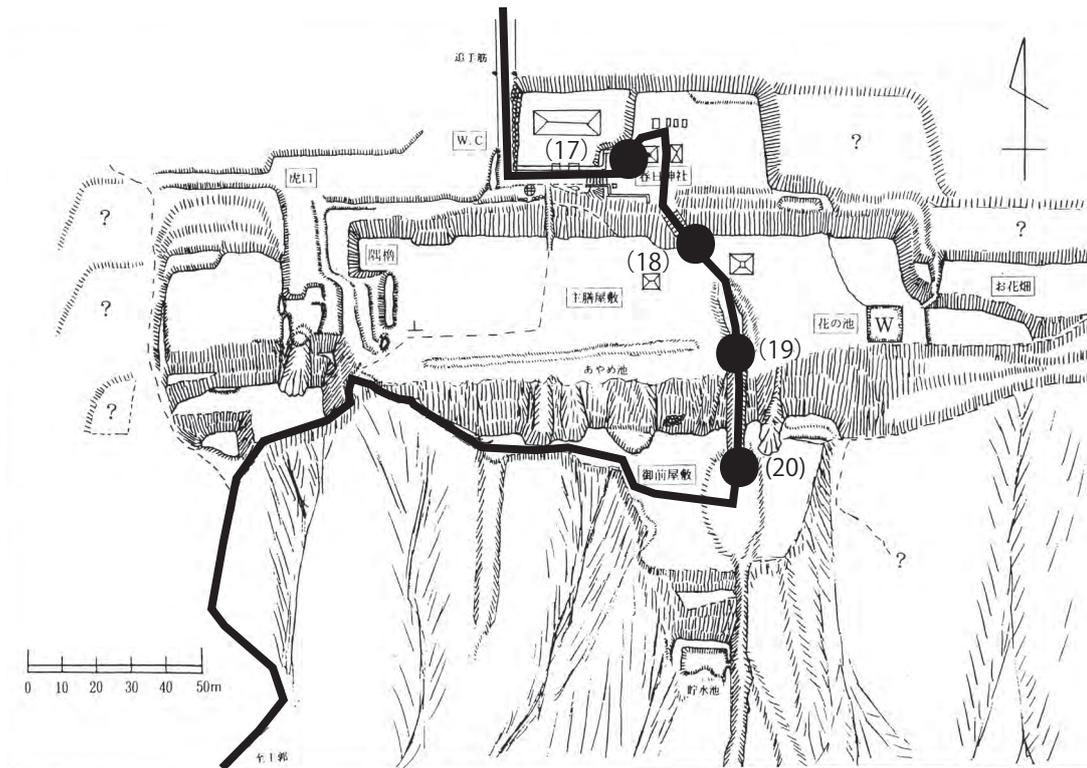


図4 八上城館跡（伝主膳屋敷跡）踏査図（八上城研究会 2000：39 頁に加筆、番号 = 撮影地点）



写真 17 春日神社



写真 19 主膳屋敷跡と御前屋敷跡の間にある
縦堀の遺構

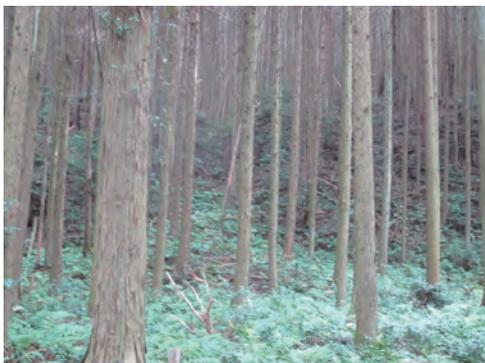


写真 18 主膳屋敷跡



写真 20 御前屋敷跡



图5 八上城跡踏査図 (八上城研究会2000:34頁に加筆、番号=撮影地点)



写真 21 登山道



写真 25 伝馬駈場跡



写真 22 右衛門丸跡の遺構



写真 26 道をふさぐ倒木



写真 23 本丸跡にたつ「表忠碑」



写真 27 藤木坂口のゲート
(外側から撮影)



写真 24 朝路池跡



写真 28 藤木坂口登山用杖

池田氏は、他の山城と連携した活用や登山、自然観察をも含めた総合的な魅力を発信していきたい、と今後の展望についても話されていた。

(2) 八上城跡踏査 (図 4、5)

9月4日の14時から16時40分まで、研修参加者のうち2名で八上城跡についての調査をおこなった。

道程としては、春日神社(写真17)方面から主膳屋敷跡(写真18)を登り、竪堀(写真19)経由で御前屋敷跡(写真20)を通過した。その後、整備された登山道(写真21)を登って、鴻の巣、茶屋丸、右衛門丸(写真22)を経て本丸跡(写真23)にいたり、朝路池(写真24)付近を巡りつつ、伝馬駈場跡(写真25)、芥丸跡を経て藤木坂方面の登山道を通って下山した。

城跡を調査している間、誰にも出会うことはなかった。しかし、後日、平成26年9月14日の補足調査で春日神社付近を通りかかった際、車で来た二人組の人が八上城を訪れようとしていた。平日か休日かでは訪れる人数も変わってくるのだろう。

踏査中は井戸、石垣、竪堀、削平地などの遺構を見学したが、どの遺構も大規模であり波多野氏の居城にふさわしいものであった。また、標高も高く登りごたえのある城である。

本丸跡には昭和6年(1931)からたつ波多野秀治公「表忠碑」がある。波多野秀治は明智光秀の丹波攻めの際、光秀軍と戦った人物である。八上城跡は光秀による丹波攻めの決戦地として強く認識されてきたことを理解した。

ヤマアカガエル、矢竹、アカマツなどの動植物を発見した。八上城跡に動植物は豊かに存在しており、動植物の面からも魅力を発信できそうである。

登山道を含めた整備状況については、遺構が大規模に残っている様子や木々の伐採整備、説明板の設置が所々の箇所でおこなわれていることを確認した。しかし、藤木坂方面では倒木が道をふさいでいた(写真26)。主膳屋敷跡、御前屋敷跡、本丸跡でも草が繁茂しており、整備が不十分な部分も見ることと

なった。

また、藤木坂方面を下山ルートとして使用する場合、ゲートの開閉箇所が外側にあるため(写真27)一見すると藤木坂方面から外に出られないように思える。登山用杖(写真28)も藤木坂入口にはまとまって存在しているが、春日神社方面の入口には存在していなかった。このことから、元来は藤木坂入口が登山ルートとして想定されていた様子を推し量ることができる。ただし、バスや車などで市外から来る場合、バス停の位置関係や駐車場所の関係から、藤木坂入口は下山ルートとして使用されやすい位置にある。そのため、見学者の困惑を招きやすくなるように思われた。

6 補足調査

フィールド研修の後に、補足調査として、9月14日(日)に再び篠山市を訪れた。今回は、車での移動ではなくJRとレンタサイクルを利用した。

また、フィールド研修やその後の調査を通じて、ノオトは篠山市の中近世城郭との関わりも深いことがわかった。

(1) 奥谷城跡踏査 (図6)

9月14日の12時から13時40分まで一人で奥谷城跡を訪れた。奥谷城跡は八上城築城以前の波多野氏の居城である。波多野氏が八上城に移った後も蕪丸と呼ばれるように、八上城の重要拠点の一つとして機能し続けた八上城遺跡群の一つである(八上城研究会2000; 20-22頁)。

道程としては、説明板(写真29)横の登山道(写真30)から登り、居館跡と目される削平地(写真31)を確認しつつ主郭にいたった。主郭から、南側の削平地や曲輪(写真32)、北側の削平地や堀切(写真33)を見学し、曲輪群を下りながら、竪堀や削平地を確認して下山した。城跡を調査している間、誰にも出会うことはなかった。

削平地、堀切、竪堀などの遺構を見学したほか、木々の伐採整備を含めた整備状況の見学もおこなった。遺構の中では、「大堀切」

とでも呼ぶべき巨大な堀切（写真34）が、研修期間に訪れた他の城と比べても、強烈な個性を放っていた。研修の折に池田氏が奥谷城跡の見学を強くすすめられた理由を推し量ることができた。

整備状況という点では、八上城跡や靱井城跡のような登山道がないため、急な坂を登ることは苦勞したが、遺構部分における木々の伐採整備がよくなされていた。坂が急なことについては、登山用杖を何本か設置する必要があるように思われた。また、一見すると入口がどこにあるか分からないので、入口周辺をより重点的に整備する必要があるとも思った。

(2) 篠山市域にある城郭へのアクセスについて

補足調査ではJRとレンタサイクルを利用したが、JRについては、篠山口駅までの快速の便が多くあった。このことから、京都や大阪からなら自動車を使わなくても、日帰りで八上城遺跡群や篠山城下を訪れることが可能である。

篠山口駅から八上城遺跡群までの道のりは、高低差のない平坦な地形で、道もまっすぐにのびている。そのため、自転車で田園や畑、山々をながめながら気持ちよく走ることができ、予想以上に楽しかった。この魅力も積極的に発信していけば、需要も高まるはずである。

(3) ノオトと篠山市の中近世城郭

一般社団法人ノオトと八上城跡を含む篠山市内の中近世城郭との関係については以下の通りである。

ノオトの公式Webサイトによると、ノオトは篠山城大書院の指定管理業務を担っており、大書院におけるキャスルウェディングのプロデュースもおこなっている。研修を通じて、ノオトの田中豊茂氏が八上城跡のパンフレット制作や淀山城整備、「里山・山城トレッキングツアー」などの活動に関わっていることもわかった。

補足調査の際に入手した篠山市の戦国山城

をめぐるサイクリングマップも田中氏が制作に関わっている。このサイクリングマップについては、曲輪など城郭の構成要素についての用語集があり、幅広い範囲の人を対象にしている。また、コンビニエンスストアの位置やインフォメーションの場所についても明記されており、実用的な部分も兼ねている。

おわりに

篠山市は、大小100近い戦国山城が残っている地域であり（八上城研究会2000；200-299頁）、その中には、丹波の歴史上重要な決戦のおこなわれた八上城跡がある。また、篠山城跡という近世史上重要な城郭が存在している。

今回の調査において、訪れた城は一部にすぎないが、それぞれの城ごとで遺構や自然環境、保存活用の様子に「個性」があることを知った。当然といえばそれまでであるが、その「個性」を実際に訪れて体感することは、文化資源という視点から文化資源の「存在」する地域を眼差す、すなわち「光」を「観る」ことにつながりうるということができただろう。

馬場（2011a, b）は、本来の機能を持たなくなった建造物の遺構と歴史的事象が後世、人々にどのように認識され、そして文化資源として保存活用されていくかについて、東京都八王子市にある後北条氏を支えた有力武将北条氏照の居城となった滝山城跡を事例として述べている。

八上城跡では、嵐（1965）が八上城落城後に出た『総見記』、『柏崎物語』、『丹波八上戦記』、『高城軍記』、『丹波興廢略記』、『靱井家日記』に、光秀が母を人質に和平を装い、波多野氏兄弟を欺いた逸話が散見していると紹介する。光秀の丹波攻めが広く語り継がれていることの証左といえ、八上城跡も重要な決戦場として認識されていることがわかる。また、炬口（1894）や浅羽（1896）は、波多野秀治が正親町天皇に献金をおこなったことや、光秀の丹波攻めで正親町天皇が波多野三兄弟を助命する詔を出した逸話を紹介している。これらの逸話から、地域の中で波多野氏が英雄として讃えられていることがわか

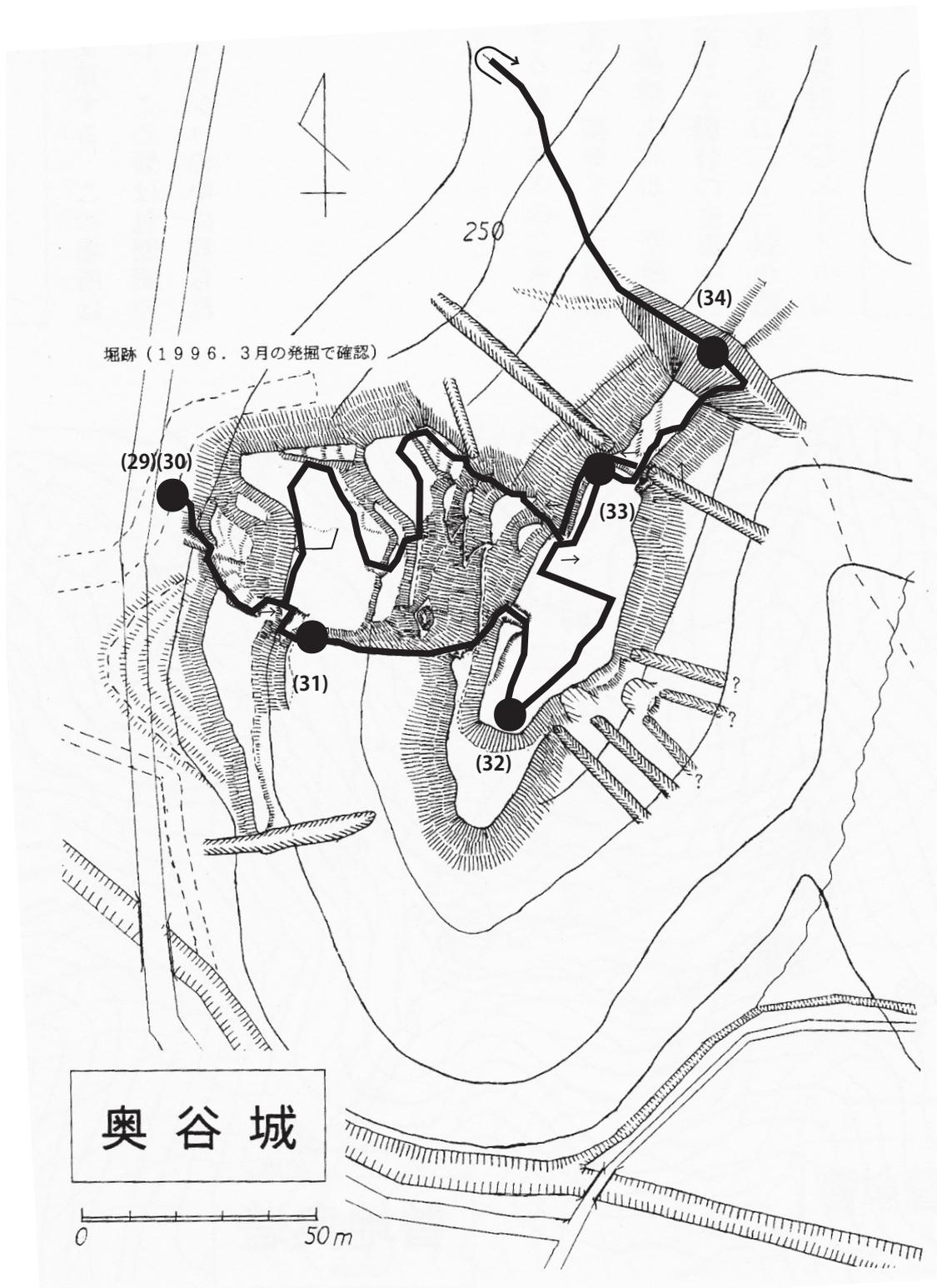


図6 奥谷城跡踏査図 (八上城研究会 2000: 277 頁に加筆、番号 = 撮影地点)



写真 29 奥谷城説明板



写真 32 曲輪遺構



写真 30 奥谷城入口



写真 33 削平地・堀切遺構



写真 31 削平地遺構



写真 34 大堀切遺構

る。八上城本丸跡の「表忠碑」はその証拠ともいえよう。

文化資源となりうる城郭の保存活用の様相について今後考えていく上で全国的視点から城郭の情報交換をすることも必要である。例を挙げると愛媛県松山市にある伊予守護河野氏の居城である湯築城跡も、1980年代後半から保存運動が展開され、2002年には国指定史跡になっている（藤田2005；84頁）。八上城跡の保存運動やその後の国史跡指定の様子と相通じるものがあり、そこから新たな八上城跡の「個性」も見いだせるように思われる。

また、岐阜県瑞浪市における美濃守護土岐氏の庶流小里氏の城である小里城跡も山麓の居館と山上の城郭遺構がセットになっているなど（岐阜県教育委員会2004；140頁）、中世から近世への歴史の変遷を物語っているという意味では八上城跡の歴史の変遷につながるものがある。

このように全国の多様な事例から総合的に八上城跡などの篠山市における中近世城郭を捉え直していくことで、城跡の新たな「個性」と保存活用のノウハウが浮かび上がってくるように思われる。今後、そのことについてより詳しく考えていきたい。

【謝辞】

今回の研修にあたりましては、篠山市教育委員会社会教育・文化財課の成田雅俊様、村上由樹様、「辻を知らう歩こう会」の津田博利様、八上校区まちづくり協議会会長の池田正男様、一般社団法人ノオトの金野幸雄様、田中豊茂様、波々伯部神社宮司の近松健一様、財様ならびに篠山市の皆様にご大変お世話になりました。末尾ではございますが、深くお礼申し上げます。

【参考文献・URL】

- 浅羽肅也（1896）『兵庫県史談 播磨』2、船井弘文堂
- 嵐瑞澂（1965）「丹波八上城落城の真相」『兵庫史學』42、38-39頁
- 河合雅雄監修（1993）『もり 人 まちづくり 丹波の森のこころみ』学芸出版社
- 岐阜県教育委員会（2004）『岐阜県中世城館跡総合調査報告書（可茂地区・東濃地区）』3、岐

阜県教育委員会

- 砂田晋司（2006）「小里城山城跡」『考古学ジャーナル』541、27-31頁
- 炬口又郎（1894）『兵庫県郷土史談』吉岡平助支店
- 馬場憲一（2011a）「地域社会における史跡の認識過程と保護のあり方」法政大学現代福祉学部『現代福祉研究』11、9-32頁
- 馬場憲一（2011b）「史跡の保護と地域社会との関わり—国史跡滝山城跡を事例として—」『日本歴史』752、91-96頁
- 兵庫県の歴史散歩編集委員会（2006）『兵庫県の歴史散歩下』山川出版社
- 藤井善布（1981）「靱井城・八上城」『日本城郭大系 大阪・兵庫』12、新人物往来社
- 藤田達生（2005）「歴史のひろば 遺跡保存運動の最前線—川岡勉・島津豊幸編『湯築城と伊予の中世』に学ぶ—」『歴史評論』663、84-94頁
- 法政大学多摩シンポジウム実行委員会（2012）『文化遺産の保存活用とNPO 法政大学第27回多摩シンポジウム報告集』岩田書院
- 中西義昌（2011）「中・近世城郭の構造分析と城郭跡の保存整備—城館史科学の視点から—」『日本歴史』752、84-91頁
- 中野良一（2009）『湯築城跡 伊予道後の中世城館』同成社
- 中村直人（2000）「丹波八上城・法光寺城遺跡群保存問題」『ヒストリア』170、67-69頁
- 中村直人（2004）「丹波八上城・法光寺城遺跡群保存問題について」『ヒストリア』190、127-129頁
- 峰岸純夫（2009）『中世の合戦と城郭』高志書院
- 八上城研究会（2000）『戦国・織豊期城郭論—丹波国八上城遺跡群に関する総合研究—』和泉書院
- 「篠山市公式Webサイト」<http://www.city.sasayama.hyogo.jp/>（2014年10月5日最終閲覧）
- 丹波新聞「5年で3つの山城址整備 12日に完成 イベント 辻地区の「知らう歩こう会」2014年04月03日」
<http://tanba.jp/modules/topics/index.php?page=article&storyid=7780>（2014年10月5日最終閲覧）
- 「NOTE 一般社団法人ノオト公式Webサイト」
<http://plus-note.jp/note/>（2014年10月5日最終閲覧）

【受贈資料】

一般社団法人ノオト（田中豊茂）「国指定史跡八上城跡」篠山市教育委員会 A3、1 枚（2014 年 9 月 2 日向井佑介氏より受贈、発行年不明）

一般社団法人ノオト「丹波篠山えこりん戦国山城めぐりサイクリングマップ」篠山市観光課 A3、1 枚（2014 年 9 月 14 日 JR 篠山口駅東口のレンタサイクル貸出場所の方より受贈、発行年不明）

篠山市教育委員会（2006）『史跡八上城跡保存管理計画策定報告書』篠山市教育委員会 A4、冊子

「宿場町・農村集落福住の町並み」篠山市教育委員会 A3、1 枚（2014 年 9 月 2 日成田雅俊氏より受贈、発行年不明）

「城下町篠山の町並み」篠山市教育委員会 A3、1 枚（2014 年 9 月 2 日成田雅俊氏より受贈、発行年不明）

田中豊茂（2014）「波々伯部の歴史」A4、冊子

津田博利（2014）「辻を知らう歩こう会の活動報告」A4、4 枚

NOTE 一般社団法人ノオト（2014）「NOTE 一般社団法人ノオトの法人概要（H26 年 4 月 1 日現在）」A4、1 枚

八上校区まちづくり協議会（2014）『やかみ高城』第 12 号、A3、1 枚

八上校区まちづくり協議会（2014）『やかみ高城』第 14 号、A3、1 枚

八上校区まちづくり協議会（2014）『やかみ高城』第 15 号、A3、1 枚